

ダンス作品分析における間テキスト性の概念の 広がり—Janet Adshead-Lansdale の論を中心に—

上田園乃・堺谷珠紀・吉田瞳来
(お茶の水女子大学大学院)
福本まあや (お茶の水女子大学)

1. 研究背景・目的

本研究の問題意識には、ダンス作品分析のプロセスにおいて間テキスト性の概念を用いることの有用性は何かという問いがある。ここで注目する Adshead-Lansdale は、ダンス作品分析法について複数の著書を発表してきている。彼女は、1980 年代にイギリスの大学入学基準や学士コースへの舞踊科目の導入を受け、作品分析の概念整理と理論の提唱を行った。彼女の著書『Dancing Texts: intertextuality and interpretation』(1999)は、間テキスト性の概念を用いて 20 世紀におけるダンス作品分析の実践例を紹介している。

本研究の目的は、ダンス作品分析において間テキスト性の概念を用いることの意義を検討することである。研究方法として、『Dancing Texts』より Martin (6 章)、Garraghan (7 章)、Dodds (9 章) の分析例を対象に、ダンス作品分析における間テキスト性という概念の適用の実際を、Adshead(1988)のダンス作品分析における概念構造に基づき抽出整理した。

2. 結果と考察

2.1. 作品分析法の議論の背景

Adshead-Lansdale(1999)はダンス作品をテキストと捉え、そこに間テキスト性を認めることで多様な解釈を認めつつも、解釈の妥当性をどのように説明しているのだろうか。彼女は、ダンス作品の解釈や解釈行為が多様で流動的なものであっても、客観的で妥当性を得るための基準となる枠組みの必要性を、Best(1992)の述べる、芸術における解釈は「解釈的合理性」に基づく構造であるという論を挙げて説明している。そのうえで Eco(1984)の読者論を引用し、相互に作用する間テキストの次元から、読者(観客)が要素を選定して解釈を行うことを強調している。彼女は、「読者に与えられている自由とは、これらのテキストのレベルをどのように活性化するかを決定し、コードとサブコードの百科事典的、間テキスト的世界から、どのコードを適用するかを選ぶ中にある」(Adshead-Lansdale 1999:19)と述べ、自分の経験から適切な参照元を取り上げるという読者の役割に言及している。

2.2. 間テキスト性の概念と作品解釈の実際

Martin は、振付家 Mark Morris の作品『Dido and Aeneas』(1989)について、その間テキストと

して 35 のテキスト(作品構成表、著者が選出したダンスに関するテキスト、同作品に関する批評家のコメント、間テキストに関する論文等)を紙面にモザイク的に配置し、そこに自身の作品解釈のテキストも提示している。このように論文そのものを脱構築することで、本章の読者に自分自身の解釈を構築する機会を与え、提示されたテキスト間に生まれる共通点や矛盾を読者自身が読解することを意図したとある。著者は、時間軸にとらわれずにテキスト同士を比較し、別の作品を再読することによって別の解釈を生むことができる可能性を指摘している。

Garraghan は、Spink 作『Heaven Ablaze in his Breast』(1990)と Marin 作『Coppélia』(1994)という共にホフマン著『砂男』を原作とした 2 作品を分析している。作品全体を通した解釈への言及は無く、原作でも重要な役割を持つ目のモチーフや、フロイトの理論においてフェティッシュなものとする衣装など、作品に散りばめられた様々な構成要素に注目し、各々のルーツを明らかにする形で間テキスト性を用いた分析を行っている。彼は、間テキスト性の概念について、「他の多くの情報源への参照が複雑な形で混入する原理」と説明し、間テキストを用いることの有用性として、自由な読み方が可能になる点を挙げている。

Dodds は、振付家 Lea Anderson の一連の作品群(1986-1995)に見られる上演場所や衣装や動き等に、大衆文化や日常生活のテキストやイメージがどのように作品に作用しているかを検討している。特定のイメージや時代と結びつくという大衆文化の性質に Dodds は注目し、演出の次元における大衆文化からの引用とポストモダンの概念の関連に間テキスト性を見出している。Anderson の作品にみられる一貫性のない要素(Dodds は「テキスト」と呼称)の並置や、オープンエンドな形式は、パブや公演といった上演場所の観客各々が様々な引用を見つけながら理解を構築する上で有用なフォーマットだと述べている。

3. まとめ

3 つの事例から、間テキスト性の概念は、作品内部の一貫性を重視して対象作品の深い読みに至ろうとする解釈プロセスを支えると同時に、作品の構成要素や要素間の関係性から無限に派生する間テキストの広がりを示し、ダンス作品の創造的な鑑賞の在り様を肯定する概念として用いられていることが本稿の作業から見えてきた。舞踊科目という文脈において、対象文献の著者らは間テキスト性を積極的に認めることで、作品鑑賞の楽しさを伝えると同時に、社会における無尽蔵のテキストから、我々が何を読み取っているか、を振り返ることを提案していると考察された。